九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

筑豊鉱山学校・筑豊工業高校の歴史と教育内容

吉田, 隆光
旧筑豊工業（鉱山）高校所蔵文化財を伝える会 : 会長

https://doi.org/10.15017/1932038

出版情報：エネルギー史研究 : 石炭を中心として. 33, pp.191-203, 2018-03-15. 九州大学附属図書館付設記録資料館産業経済資料部門
バージョン：
権利関係：

【報告】筑豊鉱山学校・筑豊工業高校の歴史と教育内容

吉田隆光

はじめに

筑豊鉱山学校は筑豊石炭鉱業組合が経営母体となり、現場中堅技術者の養成校として官立の秋田鉱山専門学校と並ぶ西日本の鉱山専門学校を目指し大正八（１９１９）年に誕生しました。

昭和二十五（１９５０）年に県立に移管されて福岡県立筑豊鉱山高等学校（以下、高等学校は高校と記載します）となり、昭和三十六年に福岡県立筑豊工業高校に改称しましたが、開校以来の採鉱科に加えて機械科・土木科・電気科などが増設され、工業高校として充実した体制になりました。

平成十七（２００５）年の閉校までに累計で一万三千五百人を超える卒業生を世に送り出し、日本の産業界に多大の貢献をしてきた学校でした。特に鉱山学校時代は炭鉱という特定の産業のために業界組合が自ら創設した全国的にも極めてユニークな学校でした。

創立から閉校までの八十六年間の歴史と各学科のカリキュラムを紹介します。

第一部　学校の歴史

第一章　経営母体の変遷

一．私立学校時代

（一）筑豊石炭鉱業組合の歴史

筑豊石炭鉱業組合は明治十八（１８８５）年に炭鉱経営者の自主規制のため福岡県の「石炭坑業人組合準則」に基づき筑前国の遠賀・鞍手・嘉麻・穂波の各郡と豊前国田川郡の五郡の連合体が「筑前国豊前国石炭坑業組合」として発足し、同年「筑豊石炭坑業組合」、明治二十六年に「筑豊石炭鉱業組合」と改称しました。

これは全国同業組合の中で最古の歴史と伝統を有するもので、日本の産業史に極めて重要な位置を占めています。また、筑前国豊前国を縮めて「筑豊」という呼称を使うようになったのは、このあたりからといわ

表一・学校名および学科名の変遷と卒業者数

校名・学科名	入学資格	修業年限	期間	卒業者数
筑豊鉱山学校　本科	旧制中学校卒	1年6カ月	• 大正 8（1919）. 4～ 昭和 6（1931）. 9	235
筑豊鉱山学校　別科	実地経験のある高等小学校卒	6カ月	• 大正10. 2～昭和5. 2 • 昭和9. 9～昭和13. 3	549
筑豊鉱山学校　普通科	高等小学校卒	4年 3年（昭和18年～）	• 昭和3（1928）. 4～ 昭和21（1946）. 9	536
筑豊鉱山学校　高等科	本校普通科卒 旧制中学校卒	1年 2年	• 昭和6（1931）. 4～ • 昭和9（1934）. 3	35
直方石炭鉱業技術員養成所①	旧制中学校卒または実地経験のある高等小学校卒	1年	• 昭和13（1938）. 4～ 昭和21（1946）. 4	2,340
九州日満工業学校②	高等小学校卒	3年	• 昭和14（1939）. 4～ 昭和20（1945）. 9	805
筑豊工業高校③　採鉱科	（新制）中学校卒	3年	• 昭和21（1946）. 10～ 昭和41（1966）. 3	863
筑豊工業高校　機械科④	中学校卒	3年	• 昭和27（1952）. 4～ 平成17（2005）. 3	3,146
筑豊工業高校　土木科	中学校卒	3年	• 昭和33（1958）. 4～ 平成17（2005）. 3	1,638
筑豊工業高校　電気科	中学校卒	3年	• 昭和38（1963）. 4～ 平成15（2003）. 3	2,541
筑豊工業高校　開発土木科⑤	中学校卒	3年	• 昭和41（1966）. 4～ 平成4（1992）. 3	905
合　計				13,593

註：①十回生（昭和十八・1943年三月卒）までは直方石炭鑛現場係員養成所
②昭和十九年三月までは九州日満鉱業技術員養成所
③昭和二十一年十月～昭和二十三年三月は筑豊鉱山工業学校　昭和二十三年四月～昭和二十五年三月は筑豊鉱山高校
昭和二十五年四月～昭和三十六年三月は福岡県立筑豊鉱山高校　昭和三十六年四から福岡県立筑豊工業高校
④三回生（昭和三十二年三月卒）までは鉱山機械科
⑤十八回生（（昭和五十九年三月卒）までは開発工学科

れ、その点でも重要です。

筑豊石炭鉱業組合は大正八（1919）年四月に筑豊鉱山学校を発足（開校は翌月の五月）した後も名称が変わり続け、昭和九（1934）年五月に社団法人・筑豊石炭鉱業会、昭和十七年四月に石炭統制会九州支部、昭和二十一年四月に日本石炭鉱業会、昭和二十三年二月に九州石炭鉱業会となりました。

（二）旧九州日満工業学校との合併と校名の変更

ソ連の侵攻による満洲帝国の崩壊に伴い、経営母体を失った九州日満工業学校は昭和二十（1945）年九月にわずか六年の短い歴史を終えて閉校しました。教職員と在学生のため、昭和二十一年一月に筑豊鉱山工業学校として発足、同年十月に経営母体が同じ筑豊鉱山学校と合併し、旧筑豊鉱山学校は筑豊鉱山工業学校に、旧筑豊鉱山工業学校（旧九州日満工業学校）は筑豊鉱山工業学校西校に、それぞれ校名を変更しました。

筑豊鉱山工業学校西校は翌年の昭和二十二年七月に校地・校舎を直方市に移管し直方市立直方第三中学校に改組され現在に至っています。

筑豊鉱山工業学校は学制改革に伴い昭和二十三年四月に新制高校として筑豊鉱山高校と校名を改称しました。

二．公立学校時代

昭和二十五（1950）年四月に県立に移管され、福岡県立筑豊鉱山高校となりました。

昭和三十六年四月に福岡県立筑豊工業高校に校名を改称しました。

平成十七（２００５）年三月に福岡県立鞍手竜徳高校に統合され閉校となりました。

第二章　石炭業界の好不況が学校経営に及ぼした影響

筑豊鉱山学校の経営母体である筑豊石炭鉱業組合は、産業界の好況・不況の影響を大きく受ける石炭業界の同業者組合であり財政的に不安定であるため、石炭業界の好不況は学校経営に大きな影響を及ぼしました。

この間の推移は表二の通りですが好況の期間は短く不況の期間は長く（概ね二倍）、不況の終末期に学校存亡の危機が訪れていることがわかります。

一．開校の頃

開校が検討されていた大正中期は欧州大戦に伴い日本経済が活況を呈していた時代で、炭価高騰により石炭業界も好況で、各炭鉱が中堅技術者を求めていたことが背景にありました。

二．第一次危機

輸入炭の増加などの影響により炭価が下落し、石炭業界の不況が長期化した大正十三（１９２４）年～十四年には本科・別科とも合格者・卒業者が減少しました。これは不況により筑豊の各炭鉱では縮小整理を行う会社が多く、石炭業界の将来に不安が生じたためです。

生徒数の減少により学校存亡の危機を迎えましたが、昭和二（１９２７）年から出炭量の増加により　好況に転じ受験者数も増加しました。

表二・石炭業界の状況と筑豊鉱山学校の学校経営

時　期	石　炭　業　界	で　き　ご　と	学　校　経　営
大正５年	好況（炭価高騰）		
６年	〃		
７年	〃	• 欧州大戦終了	
８年			• 筑豊鉱山学校開校
９年	不況（炭価下落）		
10年	〃		
11年	〃		
12年	〃		
13年	〃		
14年	〃		• 第一次存亡危機
15年			
昭和２年	好況（出炭量増加）		
３年	〃		
４年		• 世界大恐慌起こる	
５年	不況（炭価下落）		
６年	〃		
７年	〃		
８年	〃		
９年	〃		• 第二次存亡危機
10年			
11年			
12年	好況（出炭量増加）	• 支那事変起こる	
13年	〃		
14年	〃		
15年	〃		
16年	不況（出炭量減少）	• 大東亜戦争起こる	
17年	〃　• 戦争拡大により		
18年	〃　出征が増加して		
19年	〃　炭鉱労働者不足		
20年	〃	• 敗戦	
21年	〃		• 筑豊鉱山工業学校に改称

註：戦争の名称は当時の日本政府の呼称による。

表三・学科別の合格者数と卒業者数の推移

	本科		別科	
	合格	卒業	合格	卒業
大正８年	50	①42		
大正９年	43	②40		
大正10年	29	③20	58	①56
			39	②38
大正11年	26	④19	38	③36
			21	④21
大正12年		⑤５	26	⑤25
			25	⑥24
大正13年	12	⑥８	19	⑦17
			16	⑧17
大正14年	19	⑦10		⑨19
			17	⑩17
大正15年	20	⑧18	14	⑪13
			18	⑫17

註：①は卒業回数を示す

三．第二次危機

米国発の世界大恐慌が日本にも波及して石炭需要が激減し再び長期の石炭不況となりました。

昭和九（１９３４）年二月には筑豊石炭鉱業組合で学校整理に関する協議が行われ、学校運営経費削減が決定しました。三月には五名の先生方がやむなく退職されました。福田校長自身も自ら減俸を申し出られるなど正に学校存亡の危機を迎えました。

その後昭和十二年から大陸での戦火が拡大すると出炭量が増加し、筑豊炭田も好況期を迎え、学校経営の危機を脱しました。

第二部　私立学校時代の教育

筑豊鉱山学校の特色は本科・別科・普通科・高等科および附設校である直方石炭鉱業技術員養成所の卒業者のほぼ全員が炭鉱に就職することで、全国的にも数少ない特別な学校でした。

第一章　本科（大正八年四月～昭和六年九月）

入学資格	旧制中学校卒業以上で身体剛健なる者
習業年限	一年六カ月
学費	十五円↓就業年限一年六カ月を通じ
通学	全員寄宿舎に入寮
卒業生	十二回　二百三十五人

教育内容は一年間学校で座学、残り六カ月間が実習となっていました。

座学は採鉱学・測量などの専門科目と英語・理科などの基礎科目で、毎週四十六時間の授業が行われていました。

実習は各炭鉱に出向いて現場指導員の下で、採掘・運搬・排水・通気・機械取扱い等の技術取得に努め、また炭鉱全般に関する知識習得のため、事務仕事も学習しました。

実習中は毎日その日の作業内容をまとめて指導員に提出し、承認を得ることが義務づけられていました。また一週間に一度は学校に戻り、特別な講義を四時間受けていました。

第一回生をみると、受験者百八十人、合格者五十人、卒業者四十二人となっており、かなりの難関だったことがわかります。合格者の出身校を見ると嘉穂中学九人、東筑中学六人、修猷館中学三人と今も変わらぬ

進学校の名があり、学力レベルの高さがうかがえます。

卒業者数の推移を見ると二回生は四十人でしたが以後は急減し、四回生十九人、五回生（大正十三年九月卒）五人、六回生（大正十四年九月卒）八人と一桁になっており、学校存亡の危機であったことがわかります。

表四・昭和二年度の本科教育課程

学年学期別	第１学年			第２学年
学 科 目	第１学期 ４～７月	第２学期 ９～11月	第３学期 12～３月	４～８月
修　　身	1	1	1	
作　　文	1	1	1	
英　　語	3	3	3	
応用力学	5	3	4	
物理及化学	3	3	3	
地質及鉱物	2	2	2	
採鉱学	4	5	6	1
測量学	3	3	3	
測量実習	5	5	5	
機械工学	2	3	3	
電気工学	2	2	2	
製　　図	6	6	6	
材料及施工法	2	2		
法令及経済	1	1	1	4
特別講義	随時	随時	随時	随時
見学及実習	6	6	6	40
合計	46	46	46	45

第二章　別科（大正十年二月～昭和五年二月および昭和九年九月～昭和十三年三月）

入学資格は炭鉱での実務経験が必要とされていた点が本科との大きな違いで、所属炭鉱の推薦も必要とされていました。

（発足当時）

尋常小学校卒業以上の学力を有する満十七歳以上の男子で筑豊石炭鉱業組合所属炭鉱に従業し当該炭鉱の推薦を受けた者

（昭和二年）

高等小学校卒業以上の学力を有する満十九歳以上の男子で坑内作業の実地経験三年以上、筑豊石炭鉱業組合所属炭鉱に従業し当該炭鉱の推薦を受けた者

習業年限	六カ月
学　費	徴収しない
通　学	全員通学

卒業生は第一期が十八回・四百十二人、第二期が五回・百三十七人で計二十三回・五百四十九人

教育内容は座学のみで、専門科目として採鉱学・測量・電気・機械、基礎科目として数学・物理など、毎週三十六時間の授業が行われていました。

別科設立の目的は、各炭鉱で実地に明るい前途有望な現場係員に極めて短期間に最も必要な専門知識を与えることにありました。

また会社から推薦を受けているため、会社勤務時と同様の給与と待遇を受けていました。

第一回生をみると、合格者五十八人、卒業者五十六人となっていて、上位推薦炭鉱は三井各鉱から九人、明治各鉱から七人、貝島各鉱から六人、三菱各鉱から五人でした。

卒業者数の推移をみると三回生三十六人、五回生二十五人、七回生十七人と本科と同様、急速に減少して学校経営の危機を迎えました。

表五・昭和二年度の別科教育課程

学科目	毎週時数
修身	1
英語	2
数学	3
物理学	3
電気工学	2
製図	3
材料及施工法	2
化学	2
採鉱学	9
測量及同実習	5
機械工学	2
法令及経済	2
実習	①
合計	36

註：上の表の①は日曜日および休暇中に実施

第三章　普通科（昭和三年四月～昭和二十一年九月）

入学資格	高等小学校卒業以上の満十四歳以上十八歳以下の男子で稼働炭鉱からの許可を得た者
習業年限	一年単位の四年　昭和十八年から三年に短縮
卒業生	十七回　五百三十六人

教育内容は、前期の半年間は毎週三十六時間の座学を中心とする学習、後期の半年間は現場実習を中心とする実務学習で、これを四年間交互に行い現場実習中も一週間に一度は学校に戻り、五時間の学科補習を受けるようになっていました。この制度を「サンドウィッチ・システム」と呼び、もともとはドイツのボーフム鉱山学校で用いられていた制度でした。

一年生・二年生の前期は基礎教科（国語漢文・数学・物理など）、後期の実習は一年生は坑外作業（選炭・安全灯室など）で、二年生は坑外作業二カ月半（修理工場）・坑内作業四カ月（測量など）でした。

三年生・四年生の前期は専門教科（応用力学・測量・機械・電気・採鉱実験など）、後期の実習は坑内作業（採炭・掘進・支柱など）でした。

第一回生をみると、受験者七十五人、合格者五十一人となっていて不況期の第七回生（昭和九年１９３４）は受験者二十一人、合格者十七人と減少しましたが、昭和十四年からは別科の廃止に伴い学校が普通科だけとなったため、受験者二百二十四人、合格者五十人の狭き門になりました。

また昭和十四年から座学は毎週三十六時間となりました。

昭和六年の学校要覧によると、普通科の設立目的は「年少者を特別制度にて養成し、常識と創造力と実行力に富む下級係員を石炭業界に供給する。」とされていますが、普通科卒業生の中には就職後に自己努力を重ねて各炭鉱の幹部職に就任された方も多数おられます。

表六・昭和十四年度の普通科教育課程

学科目	第１学年	第２学年	第３学年	第４学年
修身	1	1	1	1
公民			1	2
国語漢文	4	2	2	1
英語	4	2	2	2
数学	5	4	3	1
地理歴史	2	2	1	1
物理	1	2	2	
化学		3	1	
製図	3	2	2	2
応用力学			1	2
機械工学			2	2
電気工学			1	2
地質鉱床		2		
採鉱学	1	1	3	4.5
鉱業法規				0.5
火薬学				1
測量法	3	3	2	2
実習	5	5	5	5
教練	3	3	3	3
剣道	2	2	2	2
体操	2	2	2	2
合計	36	36	36	36

第四章　高等科（昭和六年四月～昭和九年三月）

入学資格	第一部・本校普通科卒業者で優秀者 第二部・旧制中学校卒業以上
習業年限	第一部・一年　第二部・二年
卒業生	二回　三十五人

本科の廃止を受け、これに代わるものとして設立されました。

教育内容は第一部と第二部で異なります。

第一部：純然たる高等科としての実習を含めて毎週四十二時間専門教科（採鉱学、測量、製図、英語、理科など）を一年間学習します。

第二部：最初の一年間は坑内・坑外での現場実習で、その間毎週五時間程度の授業が行われます。最後の一年間は毎週四十二時間各専門教科を学習します。

この制度は第二代福田政記校長の教育信念であった「先に行動させ、しかる後に学習させる」を実践するものでしたが、前述の学校運営の第二次危機に直面し、わずか三年で閉幕という残念な結果になりました。卒業生三十五人は各学科の中で最も少ないものです。

表七・昭和六年度の高等科教育課程

学科目	第1部①	第2部②
修身	1	1
作文	1	1
英語	6	3
数学	2	2
理科	3	3
製図	3	5
応用力学、材料学	2	2
機械工学	2	2
電気工学	1	1
地質鉱物	1	1
採鉱学	5	5
採鉱実験	2	2
測量法	2	6
法制経済及簿記	2	2
体操	3	
実習	6	6
合計	42	42

註：①本校普通科出身者
　　②旧制中学校出身者

第五章　直方石炭鉱業技術員養成所および九州日満工業学校

それぞれの入学資格・修業年限・期間・卒業者数は前に掲げた表一の通りです。

一．（附設）直方石炭鉱業技術員養成所（直方石炭鑛現場係員養成所から改称）

昭和十二（1937）年に商工省の石炭増産奨励五カ年計画に基づき、一年で四百人、五カ年で二千人の炭鉱技術員を養成するため、筑豊と北海道の石炭鉱業会に教育を委託したものです。

筑豊では筑豊鉱山学校内に設立して年二百五十人を養成し、北海道では札幌工業学校内に設立して年百五十人を養成することになりました。筑豊鉱山学校の施設・教員を利用したため、学校経営の安定に寄与しました。

表八・昭和十三年度の石炭鑛現場係員養成所学習課程

学科目	時間数
修身公民	1
採鉱理科	2
地質鉱物	1
火薬学	1
採鉱学	13
材料及施工法	1
鉱業法令	1
測量法	5
電気工学	2
製図	2
機械工学	2
教練体操	2
数学	1
合計	34

二、九州日満工業学校（九州日満鉱業技術員養成所から改組）

昭和十四（１９３９）年に満洲国の鉱工業技術者養成のため九州日満鉱業技術員養成所が設立されました。日満鉱業技術員養成所は他に秋田県秋田市（昭和十三年設立）と山形県鶴岡市（昭和十五年設立）の二校がありました。昭和十九年に九州日満工業学校に改組されました、戦後筑豊鉱山学校に統合された経緯は前述の通りです。

日満学校（九州日満鉱業技術員養成所および九州日満工業学校の総称）については「旧筑豊工業（高校）所蔵文化財を伝える会」会員の榊正澄氏が「エネルギー史研究」第二十九号（２０１４年発行）に「日満学校の歴史」と題して同校の歴史と採鉱科・冶金科・機械科のカリキュラムを寄稿していますので、参照下さい。

なお、養成所および日満学校の卒業生も筑豊工業高校の卒業生名簿に統合して掲載されております。

第三部　公立学校時代の教育

福岡県立筑豊鉱山高校から福岡県立筑豊工業高校の時代は、採鉱科が開発工学科から開発土木科と改称、更に機械科・土木科・電気科が増設されて工業高校として充実した体制となりました。

第一章　採鉱科（昭和二十一年十月～昭和四十一年三月）、開発工学科（昭和四十一年四月～昭和五十七年三月）、開発土木科（昭和五十七年四月～平成四年三月）

採鉱科は昭和二十一（１９４６）年十月に筑豊鉱山学校が九州日満工業学校と合併して校名を変更した際に普通科から採鉱科に改称しました。

表九・昭和三十三年度の採鉱科教育課程

工業教科 科目	1年	2年	3年	計
実習	2	2	6	10
製図	2	2		4
採鉱	2	3	2	7
選鉱			2	2
地質鉱物	2			2
火薬			2	2
鉱山保安			2	2
鉱山機械		2		2
鉱床		2		2
測量	2	2	2	6
土木施工		2		2
鉱業法規			2	2
電気一般		2	2	4
機械一般	2			2
小計	12	17	20	49
合計	35	35	35	105
ホームルーム	1	1	1	3
クラブ活動	1	1	1	3

普通教科 教科	科目	1年	2年	3年	計
国語	国語甲	3	3	3	9
社会	日本史	3	3		9
	世界史			3	
数学	数学Ⅰ	6			12
	数学Ⅱ		3		
	数学Ⅲ			3	
理科	物理	5			8
	化学		3		
保健体育	体育	2	2	3	9
	保健	1	1		
外国語	英語	3	3	3	9
小計		23	18	15	56

採鉱科は昭和四十一（１９６６）年四月から開発工学科に科名を変更しました。この背景には石炭産業界の衰退の波があり、開発工学科という名称は数年前から行ってきた体質改善による学科内容の変貌と、卒業生の就職先との実態に即したものとなるよう苦心した結果です。

表十・昭和四十一年度の開発工学科教育課程

工業教科 科目	1年	2年	3年	計
実習	2	4	5	11
製図	2	2		4
測量	2	2	2	6
地鉱	2			2
採鉱		3	3	6
選鉱			2	2
火薬		2	2	4
土木施工	2			2
機械	2			2
電気		2	2	4
鉱床		2		2
土質			2	2
冶金			3	3
小計	12	17	21	50
合計	36	36	36	108

普通教科 教科	科目	1年	2年	3年	計
国語	現代国語	3	2	2	9
	古典		1	1	
社会	倫理社会		2		9
	政治経済			2	
	世界史A		3		
	地理A	2			
数学	数学Ⅰ	5			12
	応用数学		4	3	
理科	物理A	3			6
	化学A	3			
保健体育	保健		1		9
	体育	3	2	3	
書道		1			1
外国語	英語A	3	3	3	9
小計		23	18	14	55
ホームルーム		1	1	1	3

開発工学科は昭和五十七（１９８２）年四月から開発土木科に科名を変更しました。これはその年度から新教育課程に移行するにあたり、教育内容に即応した学科名に変更し一層の充実発展を図る必要ができたからでした。

平成四（１９９２）年三月に開発土木科は廃止されました。

表十一・昭和五十七年度の開発土木科教育課程

工業教科 科目	1年	2年	3年	計
工業基礎	3			3
実習	2	4	5	11
土木製図		2	2	4
測量	2	2	1	5
工業数理	2			2
土木施工		2		2
応用力学		2	3	5
地質工学Ⅰ	2	2		4
地質工学Ⅱ			4	4
土木設計			2	2
火薬学			2	2
小計	11	14	19	44
教科外活動	2	2	2	6
合計	33	33	33	99

普通教科 教科	科目	1年	2年	3年	計
国語	国語Ⅰ	4			10
	現代国語		2	2	
	古典Ⅰ甲			2	
社会	現代社会	2			9
	倫理社会		2		
	政治経済			2	
	日本史		3		
数学	数学Ⅰ	3			8
	応用数学		3	2	
理科	理科Ⅰ	3			3
保健体育	保健	1	1		9
	体育	2	3	2	
芸術	書道Ⅰ	2			2
	音楽Ⅰ				
外国語	英語Ⅰ	3			8
	英語A		3	2	
小計		20	17	12	49

普通科・採鉱科・開発工学科・開発土木科と科名を変更しながらの六十四年間でした。昭和二十七（1952）年に機械科が増設されるまで採鉱科だけの時期があり、本校の歴史と伝統を守ってきた学科でした。

第二章　機械科（昭和二十七年四月～平成十七年三月）

福岡県立筑豊工業高校への機械科の増設については、昭和二十六年六月に学校長・父母教師会会長が直方市長・直方市議会議長に陳情書を提出し、七月になって直方市長・直方市議会議長から福岡県議会議長に陳情書が提出されました。

その内容は「直方市は機械工場が多数設けられ、筑豊四近の機械製造中心地であります。従って斯業の教育に寄与し、併せて市内中学校卒業生の切なる志望に応えるため本校に機械科課程の併置されることを切望いたす次第であります。」でした。

これに応えて昭和二十七年四月に鉱山機械科が増設されることになりました。昭和三十一年四月から機械科に科名が変更され、昭和三十七年四月には一学級増の二学級となりましたが、平成九（1997）年四月からは一学級減となり、平成十七年三月の閉校時まで存続しました。

表十二・昭和三十三年度の機械科教育課程

工業教科 科目	1年	2年	3年	計
実習		4	4	8
製図	3	3	3	9
工作	4	2	2	8
設計			3	3
材料	2			2
応用力学	3	2		5
原動機		3	2	5
各種機械			2	2
工場経営			2	2
自動車一般				
電気一般		3	2	5
小計	12	17	20	49
合計	35	35	35	105
ホームルーム	1	1	1	3
クラブ活動	1	1	1	3

普通教科 教科	科目	1年	2年	3年	計
国語	国語甲	3	3	3	9
社会	日本史	3	3		9
	世界史			3	
数学	数学Ⅰ	6			12
	数学Ⅱ		3		
	数学Ⅲ			3	
理科	物理	5			8
	化学		3		
保健体育	体育	2	2	3	9
	保健	1	1		
外国語	英語	3	3	3	9
小計		23	18	15	56

第三章　土木科（昭和三十三年四月～平成十七年三月）

土木科は昭和三十三（1958）年、福岡県立筑豊鉱山高校を直鞍地区における唯一の工業高校として施設・設備を充実させるということで、福岡県立宮田工業高校を廃止して福岡県立鞍手商業高校を設立しました。

そして宮田工業高校土木科の全日制二・三年生を筑豊鉱山高校に移管しました。（一年生は本校で募集する）

筑豊工業高校へ改称後の昭和四十年には土木科の定員五十人に対して入学志願者百六十四人で大変高い競争率になっていました。

平成二（１９９０）年四月に一学級を増加し二学級になりましたが、平成四年四月に一学級減少、その後平成十七年年三月の閉校時まで存続しました。

表十三・昭和三十三年度の土木科教育課程

工業教科 科目	1年	2年	3年	計
実習	2	2	6	10
製図	2	2	2	6
測量	2	2	2	6
土木施工		3		3
通路	2	2		4
水理		3		3
水工			4	4
応用力学	2	3		5
鉄筋コンクリート			2	2
橋梁			2	2
土木材料	2			2
機械電気			2	2
小計	12	17	20	49
合計	35	35	35	105
ホームルーム	1	1	1	3
クラブ活動	1	1	1	3

普通教科 教科	科目	1年	2年	3年	計
国語	国語甲	3	3	3	9
社会	日本史	3	3		9
	世界史			3	
数学	数学Ⅰ	6			12
	数学Ⅱ		3		
	数学Ⅲ			3	
理科	物理	5			8
	化学		3		
保健体育	体育	2	2	3	9
	保健	1	1		
外国語	英語	3	3	3	9
小計		23	18	15	56

第四章　電気科（昭和三十八年四月～平成十五年三月）

戦後のベビーブームの影響と高校進学率の向上に対応するため、昭和三十八（１９６３）年四月に本校に電気科（二学級）が新設されました。前年の機械科の一学級増と併せて二年間で倍増することになりました。

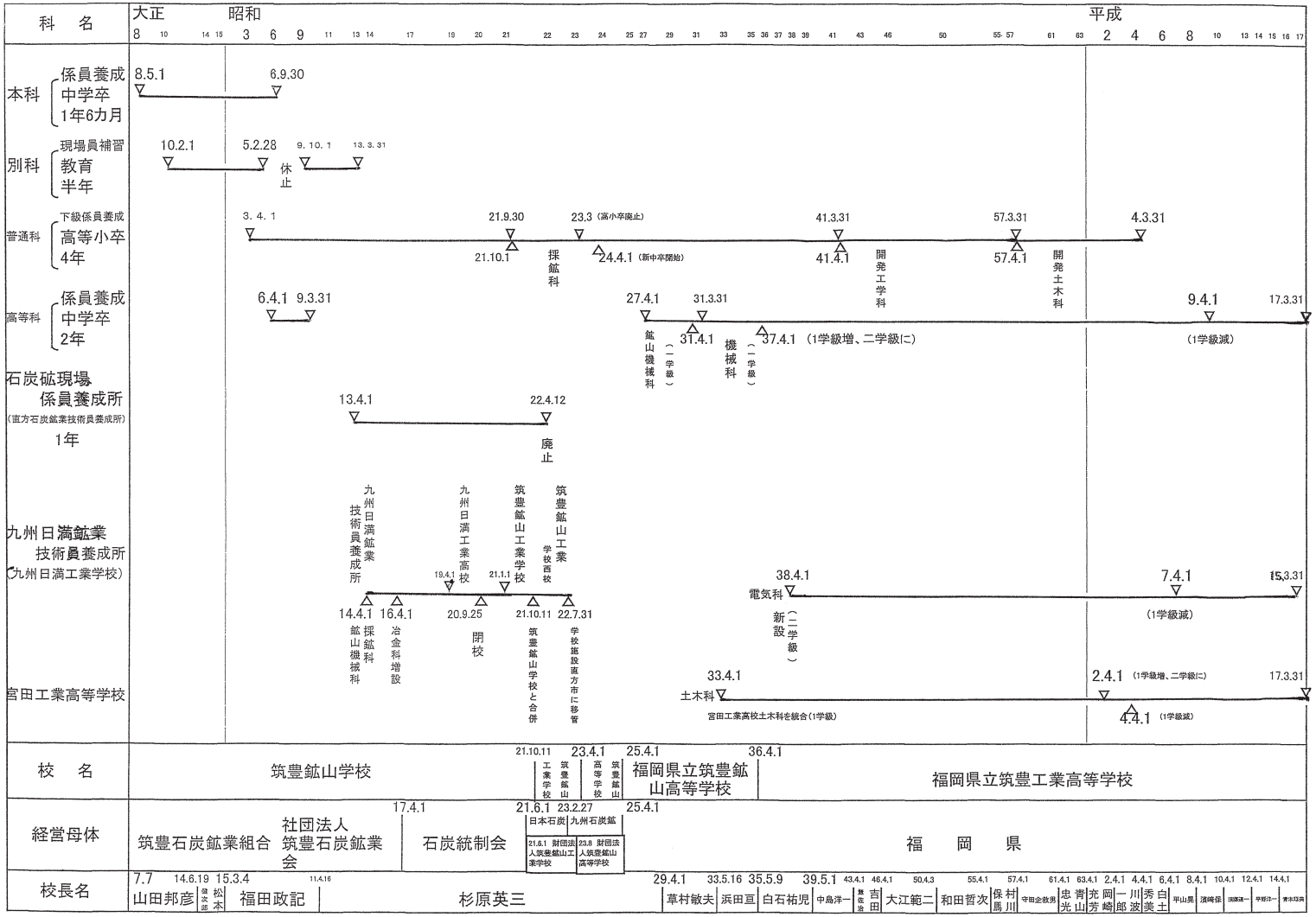
平成七（１９９５）年四月に一学級減となり、本校の閉校に先立ち平成十五年三月に電気科は廃止されました。

表十四・昭和四十一年度の電気科教育課程

工業教科 科目	1年	2年	3年	計
実習	2	3	3	8
製図	3		3	6
理論	5	2		7
計測		2	1	3
機器		3	2	5
送配		3	3	6
応用		2		2
電子		2	3	5
電材			2	2
法規			1	1
制御			3	3
機械	2			2
小計	12	17	21	50
合計	36	36	36	108

普通教科 教科	科目	1年	2年	3年	計
国語	現代国語	3	2	2	9
	古典		1	1	
社会	倫理社会		2		9
	政治経済			2	
	世界史A		3		
	地理A	2			
数学	数学Ⅰ	5			12
	応用数学		4	3	
理科	物理A	3			6
	化学A	3			
保健体育	保健		1		9
	体育	3	2	3	
書道		1			1
外国語	英語A	3	3	3	9
小計		23	18	14	55
ホームルーム		1	1	1	3

表十五・本校の変遷概覧


科名
大正 昭和 平成
本科 係員養成 中学卒 1年6カ月
8.5.1 6.9.30
別科 現場員補習 教育 半年
10.2.1 5.2.28 休止 9.10.1 13.3.31
普通科 下級係員養成 高等小卒 4年
3.4.1 21.9.30 23.3（高小卒廃止） 41.3.31 57.3.31 4.3.31
21.10.1 採鉱科 24.4.1（新中卒開始） 41.4.1 開発工学科 57.4.1 開発土木科
高等科 係員養成 中学卒 2年
6.4.1 9.3.31 27.4.1 31.3.31 9.4.1 17.3.31
鉱山機械科（一学級） 31.4.1 機械科（一学級） 37.4.1（1学級増、二学級に）
（1学級減）
石炭砿現場係員養成所（直方石炭鉱業技術員養成所）1年
13.4.1 22.4.12
廃止
九州日満鉱業技術員養成所（九州日満工業学校）
九州日満鉱業技術員養成所 14.4.1 採鉱科 鉱山機械科 16.4.1 冶金科増設
九州日満工業高校 19.4.1 20.9.25 閉校
筑豊鉱山工業学校 21.1.1 21.10.11 筑豊鉱山学校と合併
筑豊鉱山工業学校西校 22.7.31 学校施設直方市に移管
38.4.1 電気科（二学級）新設 7.4.1 15.3.31
（1学級減）
宮田工業高等学校
33.4.1 土木科 宮田工業高校土木科を統合（1学級）
2.4.1（1学級増、二学級に） 17.3.31
4.4.1（1学級減）
校名
筑豊鉱山学校 21.10.11 工業学校 筑豊鉱山 23.4.1 高等学校 筑豊鉱山 25.4.1 福岡県立筑豊鉱山高等学校 36.4.1 福岡県立筑豊工業高等学校
経営母体
筑豊石炭鉱業組合 社団法人筑豊石炭鉱業会 17.4.1 石炭統制会 21.6.1 日本石炭 21.6.1 財団法人筑豊鉱山工業学校 23.2.27 九州石炭鉱 23.8 財団法人筑豊鉱山高等学校 25.4.1 福岡県
校長名
7.7 山田邦彦 14.6.19 松本 15.3.4 福田政記 11.4.16 杉原英三 29.4.1 草村敏夫 33.5.16 浜田亘 35.5.9 白石祐児 39.5.1 中島洋一 43.4.1 吉田 46.4.1 大江範二 50.4.3 和田哲次 55.4.1 保村 57.4.1 川 61.4.1 守田金敦男 63.4.1 忠光 2.4.1 光芳 4.4.1 岡崎 6.4.1 一郎 8.4.1 川波 10.4.1 秀美 12.4.1 白土 14.4.1 平山晃 清崎保 浜田誠一 平野洋一 青木琢哉

まとめ

本校は大正八（１９１９）年の創立以来昭和・平成にわたって百年の歴史を重ね、この間に経営形態は筑豊石炭鉱業組合による私立学校から福岡県立学校に、校名も筑豊鉱山学校から筑豊鉱山高校、更に筑豊工業高校に変わりました。また昭和二十一（１９４６）年には旧九州日満工業学校、昭和三十三年には旧宮田工業高校土木科を統合し、昭和三十八年には電気科を新設して時代の要請に沿った学科構成を有する工業高校になり、かつての炭鉱のみならず日本の産業界全般に人材を供給して貢献してきました。

小生も本校の高校生として三年間学んだ後、昭和三十六年から三十六年の長きにわたり本校の教員として奉職してまいりました。この間、多くの方との出会いの中で心の強さ、忍耐、向上心を経験し、本当に幸せを感じました。本校の卒業生には皆「工学人」としての「自覚」と「礼節」が生き続けておられると思います。

筑豊地区の県立高校の整理統合に伴い、平成十七（２００５）年に宮若市の鞍手竜徳高校に統合され本校は閉校となりました。本校に残された開校以来の膨大な文化財（教材・鉱物標本など）は福岡県立の九州歴史資料館に移管されました。平成二十年に直方市植木から移転して来られた福岡県立筑豊高校のご好意により同校校舎の一角に所蔵文化財の一部が展示されることになりました。

同年に資料室の管理、来訪者への説明を目的として「旧筑豊工業（鉱山）高校所蔵文化財を伝える会」が発足しました。本校の同窓会である地光会の会員を中心として趣旨に賛同するメンバーも加わり、毎週日曜日の十三時から十六時まで交代で詰めて来訪者に展示資料の説明やＤＶＤの上映を行っています。今後とも「炎」が消えることのないよう本校の伝統ある歴史を後世に伝えられれば、と思います。